100歳 なっても ちゃーがんじゅー

糸満市では、今年度22人が100歳というご長寿を迎えます。9月20日の敬老の日を前に、新100歳を迎えるお二人にお話を伺う機会がありましたので、皆さんと一緒に健康長寿にあやかるため、長寿の秘訣とともに紹介させていただきます♪

吉川 文子さん

いい仕事場でいい人たちと出会えたことが、100歳に到達出来た秘訣です。100歳まで生きて、さらにこのようにお祝いされてありがたいです。体を動かし、本を読んで、100歳を目指してください。

玉城 勝子さん

かみあきねー(頭に商品を乗せて行商すること)で那覇などまで歩いていっていたので足腰が強いこと、週に1~2回はお喋りをするために外出していたのが長寿の秘訣。ご家族の話では、カラオケが大好きで、コロナが落ち着いたら、歌いに行くのを心待ちにしているようです。

地域おこし協力隊

ルドさんが行く #05

【サバニ、乗りましょう!】

糸満市の観光案内資料などに、必ずと言っていいくらい鮮やかな帆を飾る木造の小舟「サバニ」が掲載されています。これまでは、沖縄独特のエキゾチックな画になるから使われているのだとしか思っていませんでした。もちろん、サバニが糸満のDNAに組み込まれていることも、まだ知らなかった。

糸満市は琉球王国時代から「海人の町」と呼ばれている。それはただ単に、魚が沢山取れる海域が原因ではなく、漁師が優秀で、漁法・漁具の技術が最先端であったからです。サバニはその一つの重要な技術です。糸満産の船は、性能・耐久性・価格の面で優れ、競争力が高かったそうです。今もその伝統を引き継いで、糸満の漁師はソデイカの業法などで、わが町の豊かさに貢献しています。

私も最近、フーカキサバニ(帆掛けサバニ)で、外海10キロ以上離れているルカン礁まで行く機会がありました。そのとき、風景よりも、職人さんが鉄の釘一本も使わず木材と布だけで作った船に乗ってここまで来た事に、感動したことは忘れられない。サバニの歴史について詳しい方はいっぱいいますが、イトマンチュのルーツを理解するには、体験するしかありません。

サバニ体験は、文化・運動・仲間を兼ね備えているので、今後、重要な観光資源としても貢献し続けると確信しています。サバニの造船技術を糸満の文化財として守ろうという動きがあります。皆さんもサバニに乗って、その誇らしい文化を生で楽しもう。 **ルド**

沖縄県糸満市
Itoman City

■人口

	8月	前月比
人口	62,155	98
男	31,495	59
女	30,660	39
世帯数	27,462	47

■火災・救急

	8月	前年比
火災	2件 (18件)	0 (4件)
救急	234件 (1917件)	-16 (-38件)

※( )内は令和3年の累計

■面積 46.63Km² (2021年6月1日現在)
■市の花木 ブーゲンビレア ■市の木 ガジュマル
■市の花 日日草 ■市の魚 タマン
(人口、世帯数、火災・救急件数は2021年8月末現在)

広報 いとまん

「声の広報」届けます

目の不自由な人に糸満市の情報を届けるため、広報いとまんをCDに吹き込み配布しています。「声の広報」を希望する人は、秘書広報課(☎840-8118)まで問い合わせてください。

ラジオ広報・市役所便り(FMたまん)

■月~金
①7時45分~7時50分
②12時55分~13時
③17時55分~18時
■土~日
④12時55分~13時

INTERVIEW

Takanori TOHME

當銘 孝仁

[カヌー/スプリント/カナディアン]

沖縄水産高校時代にカヌー競技を始め、2010年には美ら島沖縄総体で全国制覇。大学、社会人とそれぞれのステージで実績を残し、大学時代から目標にしていた東京オリンピックに出場。

オリンピックの敗戦理由は未だに消化できないと、パリ五輪を見据える當銘選手にインタビューをしました。

――目標にしていたオリンピックに出場した感想は。

當銘 やはり出場できて良かったなと思います。注目度、規模の大きさなど、これまでの国内・世界大会と比べても違うと感じました。オリンピック期間中に「応援しているよ」とか「試合観たよ」といった連絡は来ていたのですが、当事者としてはあまりぱっとしませんでした。あまり凄い所にいるという感じはしていなかったんですけど、大会が終わってみるとやはりとても凄い所にいたんだなと感じがしています。

――次の目標などは。

當銘 試合自体は思うような結果には持っていけなかったけど、競技を続けたいと思える意味では、一つのモチベーションになっています。本当は、東京オリンピックに行けても行けなくても辞めるポイントでもあるのかなと考えていました。

自分自身やりたいことができないという試合はほとんどなかったのですが、今回はそのような形になってしまいました。このままでは辞めるに辞めれないというか、すっきりしない。例えば、指導者を目指すとしてもあの試合では、指導者としての説得力がない。だからもう少し頑張りたいと思っています。

ただ、今後活動するからには家族に不自由な思いをさせたくないですし、しっかりと地盤を固めて活動したいと思っています。そのために、所属先(新潟県三条市スポーツ協会)と一緒に競技資金をサポートしてくれるスポンサー企業を探しているところです。コロナ禍で大変な状況ではありますが、沖縄県内のスポンサーもみつかれば嬉しいです。

――今はオフシーズンでしょうか?糸満ではどのように過ごしていますか。

當銘 シーズンとしては、始まっています。次のオリンピックが3年後とはいえ、決まるのは2年後なので、それに向けてしっかり調整しないといけないという時期です。今は最初の準備段階なので、特に体作りとして筋トレをメインにしています。報得川で漕ぐこともありますが、技術を少しずつ確認する程度です。なるべく完成形に近い状態で次のトレーニング期に持っていきたいと考えてやっている段階ですね。

1日のトレーニングが終わったら基本的には家族とゆっくりだんらんすることが多いです。息子がまだ小さいので空いている時間に一緒に遊んで過ごしています。

――糸満市から當銘選手に続く選手が出てきて欲しいと思います。最後に、カヌー競技の魅力とはなんでしょうか。

當銘 カヌーは、より糸満らしいスポーツではないでしょうか。やはり、ハーレーもあるし、文化とオリンピックが繋がる競技だと思いますね。ハーレーをやってカヌーを始めたという経緯もあり、それがあったからこそ、ここまでこれたと思っています。自分の核のようなものですね。また、糸満市にはそういった意味で地盤があると思います。小さい子、小学生でもDNAではないけど、ハーレーを身近で見て、熱くなることがあると思います。自分自身、地元のにーにー(お兄さん)たちが活躍している姿をみてかっこいいと感じて、ハーレーに参加し始めた。祭り事というのはそういったところでも大事だと感じています。